クラス担任のための Career Guidance
［キャリアガイダンス 特別編集］
2017 >> VOL.36
RECRUIT

新学期がチャンス

「発言できる」環境づくりを目指す

新学期こそ、クラスづくりの絶好のチャンス。授業やHRで生徒が安心して発言できる環境づくりのために「哲学対話」に注目してみました。

取材・文／清水由佳（ライター・キャリアカウンセラー）

対話の機会を通じてクラスの雰囲気をつくる

クラスづくりは、最初が肝心。だからこそ、多くの先生方は、新学期とともに、アイスブレーキングやコミュニケーションゲーム、仲間づくりのレクリエーションなど、生徒同士が交流し対話できるようなさまざまなワークや機会を設けているはず。そこで、生徒同士が「対話」を深めて互いを理解していく過程が体験できる機会として、「哲学対話」に注目してみた。

「哲学対話」とは、身近なテーマや物語などを題材にして、生徒同士が自分たち自身でテーマや哲学的な問いを決め、意見を出し合って考えを深め合いながら対話していくもの。哲学対話の研究者で、多くの小中学校や高校で実践されている立教大学教授・河野哲也先生は、「普段行われている議論は、落としどころが決まっていたり、正解を導き出そうとします。しかし、哲学対話は、正解のないものを、あーでもない、こーでもないと話し合うもの。普段は全然しゃべらない生徒が、熱心に語ることもよくあり、初めてご覧になる先生方は、そんな生徒の姿に驚かれます」と言う。哲学対話は1920年代にドイツで始まり、1970年代から急激に世界中に広がった哲学の教育方法。思考力を伸ばすとともに、コミュニティをつくるという二つの目的をもつ。

「徹底するのは、『相手の話をしっかり聞く』ということ。それによって、互いの考えを理解したり、違いを受け入れたり。特に、ハワイやオーストラリア、フランスなど多民族地域では、共同体としてのコミュニティづくりを重視して実践されています」

それはまさに、新しい人間関係をつくっていく新学期のクラスづくりにも共通するものと言えそうだ。

生徒が話したい「問い」を導き出す

哲学的な問いというと、「人生とは」「生きるとは」など壮大なテーマを想像しがち。しかし哲学対話では、どんなテーマでも哲学的な対話になっていくという。

「高校生であれば、進路や仕事をテーマにしてもいいでしょう。そこから何を話し合ってみたいか生徒に投げかけてみる。そうすると、そもそも仕事とは何か？　大学は何をするところなのか？　など、いろいろな問いが出てくるはずです。それらをカテゴライズしながら、その日に話し合いたい問いを決定していく。実は、この『問い』を出していく時間から、すでに対話が始まっています」

河野先生は、「問い」を決定するまでの時間を、たっぷりとることが重要だという。

「身近なテーマであっても、対話を続けていくうちに自ずと議論は深まり、哲学的な思考が必要なレベルに到達していきます」

小学校低学年や幼稚園児でもそうなので、高校生はなおさらだ。

「哲学対話にかけられる時間の全体が10だとすると、問いを決めるまでに6くらいを費やします。そうすると、自分たちが話したいと思ったことが問いになるので、生徒は夢中になって話し始めます。時には、『何か話したいことがありますか？』とテーマ設定そのものも生徒に任せることも可能です」

教師も生徒と共に「探究する」姿勢が大事

そのような場をつくっていくのが、ファシリテーターである教師の役目。さまざまなコミュニケーションワークと同様、ここでは「教える」ということを手放す勇気が必要になる。

「教師も生徒と一緒に探究する態度が必要になります。『～なのはなぜですか？』『～ってどういう意味ですか？』など、簡単な質問を繰り返しながら、一緒に探究していきます」（質問例・コラム参照）

時には、回答をじっと「待つ」ことも大事だと河野先生。

「子どもはもともと考えられるし話せるものです。それを阻害しているのは、教師の余裕のなさ、時間のなさも大きい。だからこそ、しっかり受け止めて待つ。時には突飛な意見が出てくるかもしれません。それも、頭ごなしに否定するのではなく受け止める。受け止めたうえで、『なぜそう言えるのですか？』と問うていく。聞いて違うと言われることと、全然聞いてくれないというのは大違いです」

それが、教室全体の「安心・安全な場づくり」につながるのだ。

「さらに、哲学対話の探究する姿勢は教科の中でも活かされます。理科の授業の実験など、まさに一緒に探究が可能ですし、国語の授業などでも小説を読んで『なぜ作者はこのような話を書いたのだろうか？』など問いかけていく。教師が正解をもっているのではなく、教師もわからないことをあえて生徒と一緒に探究していく。そういう姿勢でぜひ、挑戦していただければと思います」

立教大学　文学部教育学科
教授 河野哲也先生
1963年生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後、同大学院文学研究科博士課程哲学専攻修了。博士（哲学）。国立特殊教育総合研究所、防衛大学校、玉川大学を経て、2008年より現職。哲学対話の学校への出張授業やファシリテーター養成のための研修会・勉強会などを行うNPO法人「こども哲学おとな哲学アーダコーダ」副代表理事も務める。
http://ardacoda.com/

『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』
河出ブックス
教育現場での実践例なども紹介しながら、哲学対話を実際にどのように進めていけばいいのか、場のつくり方や授業の組み立て例など、具体的に示す。「こども哲学」としているが、高校生や大人向けでも、基本は同じなので実践に向けて参考になる。

■ 対話授業の組み立て例

テーマ設定から3回の授業に分けて、じっくり話し合う場合

【1回目　45分】
- 導入（哲学対話の説明）……15分
- テーマの設定……25分
- 対話を振り返る……5分

【2回目　45分】
- 「問い」の設定……15分
- グループディスカッション……25分
- 対話を振り返る……5分

【3回目　45分】
- クラス全体でディスカッション……35分
- 対話を振り返る……10分

■ 対話を哲学的に深くしていく「質問例」

▶意味の明確化
「～ってどういう意味ですか」「～はどう定義しますか」

▶理由をたずねる
「なぜですか」「どうしてそう言えるのですか」

▶証拠をたずねる
「そう言える証拠がありますか」「何か具体例はありますか」

▶真偽を確かめる
「それは本当ですか」
「どうやったらそれが真実だと確かめられますか」

▶一般化を確認する
「それはいつも当てはまりますか」「反例はないですか」

▶前提を問う
「その考えには何か前提があるのですか」
「どうして、そういう考えが生まれるのですか」

▶含意を確認する
「そうだとすると、どういうことになるでしょうか」
「その主張どおりだと、最終的にどうなるでしょうか」

■ 哲学対話の授業の終わり方

哲学対話では正解がない。そのため、問いで始まった授業は、さらに別の問いで終了することが多い。そこから、調べ学習など次のステップへとつながっていくのだ。とはいえ、授業の終わりに、哲学対話の在り方そのものを生徒それぞれが振り返る時間をつくり、授業の評価をすることも大切だという。

自己評価のための質問例
1. あなたは人の話をきちんと聞けましたか
2. あなたは十分に発言できましたか
3. あなたはたくさん考えましたか
4. 私たちは対話に集中していましたか
5. 私たちはテーマを掘り下げたでしょうか。よい議論ができたでしょうか
6. あなたは何か新しいことを学びましたか。新しい考えが浮かびましたか
7. 対話は興味深く、楽しかったですか

リクナビ進学　高校生の主体的な進路選択を応援する先生のための
Career Guidance キャリアガイダンス
進路指導・キャリア教育の専門誌

【最新号】Vol.416　2017年2月発行
■ 特集
生徒の進路選択・決定力を高める進路指導とは？
［調査報告］第19回『高校の進路指導・キャリア教育に関する調査2016』
［特別対談］生徒の主体的な進路選択のために
長田 徹（文部科学省初等中等教育局 生徒指導調査官）
藤田晃之（筑波大学 人間系 教授）
［Special Interview］
なぜ進路を決定しない、できないのか。
学校・教師の役割と責任をあらためて考えてほしいのです
渡辺 三枝子（筑波大学 名誉教授）
■ 連載
● アクティブラーニング型授業への挑戦【番外編】
アクティブラーニング型授業研究会くまもと
● 地域課題解決型キャリア教育
銚子商業高校（千葉・県立）

『キャリアガイダンス』誌は全国の高校に贈呈しています（校長、教頭・副校長、進路指導主事先生宛に郵送）
バックナンバーの記事はすべてWEBサイトで閲覧いただけます
http://souken.shingakunet.com/career_g/　キャリアガイダンス　検索